

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[2a604-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表③

座長:長野 康平(比治山大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-07]

小学校体育科における受容感を育む関わりが児童の運動有能感、運動意欲に与える効果（教）
マット運動とハンドボールの授業との比較から

*金子 泰子¹、橋爪 和夫²、阿尾 昌樹³ (1. 富山国際大学、2. アール医療専門職大学、3. 射水市立堀岡小学校)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-08]

体力二極化問題の改善に向けた小学校体育の授業の工夫（発）
ボール運動・壁ありサッカーを事例にして

*津田 龍佑¹ (1. 金沢医科大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-09]

上肢のプライオメトリクスを取り入れた投動作指導が高校生の投能力および認識面に与える影響（教）

*池川 博史¹ (1. 兵庫県立伊丹北高等学校)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[2a604-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表③

座長:長野 康平(比治山大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-07] 小学校体育科における受容感を育む関わりが児童の運動有能感、運動意欲に与える効果 (教)

マット運動とハンドボールの授業との比較から

*金子 泰子¹、橋爪 和夫²、阿尾 昌樹³ (1. 富山国際大学、2. アール医療専門職大学、3. 射水市立堀岡小学校)

【目的】本研究では、小学校体育科において、受容感を育む言葉かけや関わりを器械運動とボール運動(ゴール型)の2単元で実施し、2単元間における児童の支援実施前後の運動有能感及び運動意欲の変容を比較し、単元によって受容感を育む関わりの効果に差があるのかを検討した。

【方法】2024年11月~2025年2月に、富山県内のD小学校に在籍する6年生96名を調査した。岡澤らによる運動有能感調査の合計点が集団の中でも特に低い値を示す児童12名を抽出した。小学校教員志望の大学生が抽出児童12人の学習支援者として学校長の許可を得て体育科の授業に参加した。大学生は抽出児童12名を中心に、クラス全員の児童の取り組みや成長をよく観察し、励ましや取り組みを認める言葉かけを行った。授業終了後に抽出児童12名との学習支援者、担任教諭、周辺の児童との会話内容と、それに対する児童の反応や言動を記録した。学習支援者が介入した授業はマット運動授業5回、ハンドボールの授業5回であった。両単元前後に、全児童を対象に運動有能感調査、運動意欲に関するアンケート調査を実施した。

【結果】抽出児童12名は、マット運動の単元終了後において「身体的有能さの認知」の高まりが見られた。ハンドボールの授業においては、「身体的有能さの認知」「運動意欲」の高まりが見られた。両単元共ににおいて、統制感が授業後に低下した。

【考察】運動有能感が低い傾向にある児童は、励ましや称賛の声かけの機会を増やすことで、「身体的有能さの認知」、「運動意欲」を高めることにつながると推察された。一方で、「統制感」が授業後に低下する児童が複数名みられた。受容感を育む関わりと、統制感の高まりとの関係について追究する必要がある。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいか
かに貢献できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 🏢 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[2a604-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表③

座長:長野 康平(比治山大学)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-08] 体力二極化問題の改善に向けた小学校体育の授業の工夫 (発)

ボール運動・壁ありサッカーを事例にして

*津田 龍佑¹ (1. 金沢医科大学)

これまで運動する子どもとそうでない子どもの二極化問題が指摘されている（日本学術会議，2008）。ボール運動・サッカーは子どもに人気のある種目であるが、ボールが硬く当たると痛い、ボール操作が難しく連続性がない、などの問題点があるため、子ども目線に立った授業内容を考案することが重要である。これに関連して、壁ありサッカーの負荷特性を検討した結果、運動の得意な子どもだけでなくそうでない子どもも、ゲーム中の活動量が増えることが確認されている（津田ほか，2023）。そこで本研究では、ボール運動「壁ありサッカー」に着目し、その効果を石川県下のO小学校の児童32名（男子17名、女子15名）を対象に検討した。体育授業は2024年7月および9月の合計5時間であった。本研究では最初に「鬼ごっこ」、次に「ストップボール」、最後に「ゲーム」を行わせた。単元前後に、体力測定項目の1つである反復横とびを測定した。また、前後に質問紙調査「運動・スポーツが好きですか」、「体育の授業が楽しいですか」を実施した。本研究の主な結果は次のとおりである。対象者全体でみると、反復横とびの成績は介入前後で有意差は認められなかった（介入前： 6 ± 11.4 回，介入後： 46.5 ± 6.5 回）。男女別にみると、反復横跳びの成績は女子では介入前後で有意差は認められなかったが（介入前： 4 ± 10.8 回，介入後： 46.9 ± 5.9 回）、県平均を下回っていた男子では単元後に有意傾向が認められた（介入前： 43.1 ± 11.9 回，介入後： 46.2 ± 7.2 回）。質問紙調査「運動・スポーツが好きですか」、「体育の授業が楽しいですか」については、「好き」と回答した児童の割合は介入前後で変化は認められなかった。以上から、ボール運動「壁ありサッカー」の授業の成果として、県平均を下回っていた男子の反復横とびの成績が改善する可能性が認められた。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[2a604-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表③

座長:長野 康平(比治山大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-09] 上肢のプライオメトリクスを取り入れた投動作指導が高校生の投能力および認識面に与える影響（教）

*池川 博史¹ (1. 兵庫県立伊丹北高等学校)

投動作は後天的に獲得される技能であり、適切な学習機会と効果的な指導が求められる。しかし、スポーツ庁による令和5年度体力・運動能力調査では、青少年のボール投げの記録が過去10年間で下降傾向にあり、学習機会や指導内容の質に課題があることが示唆される。特に高校期は、体育授業が生涯スポーツの基礎を形成する重要な時期であり、効率的な投動作の習得が求められる。その中で、注目されているのが、上肢の伸張-短縮サイクル（SSC）である。SSCは筋の弾性エネルギーや伸張反射を利用して爆発的な力を発揮する特性を持ち、投動作との親和性が高い。本研究では、SSC運動を強調したトレーニングである上肢のプライオメトリクスを用い、投動作指導を行った。毎回の授業冒頭に約7分間実施し、感覚定着と動作理解を促した。単なる動作実施ではなく、生徒がSSCの原理や目的を理解し、それを意識しながら取り組むことを重視した。対象はI高等学校の2年次男子22名とし、指導前後で遠投距離の測定および高本ほか（2003）に基づく投動作の観察的評価を実施した。加えて、指導後には記述式質問紙を配布し、生徒の認識面に与える影響をテキストマイニングにより分析した。その結果、遠投距離及び「体幹後傾」「フォロースルー」「体重移動」「体幹回転」などの動作項目、および「最終的なパターン」「合計点」において有意な技能向上が見られた。自由記述からは、SSCを意識することでフォーム改善や投げやすさを実感し、成果への達成感や満足感が高まっていたことが明らかとなった。また、ペア学習や他者からの助言が学びの深化を促す要因として肯定的に捉えられていた。一方で、競技経験や用具の違いにより混乱を覚えた生徒も存在した。これらの結果から、SSCという運動要素自体の効果に加え、それを理解し意識的に活用することが、投能力の向上に関係していると考えられる。